



(6) 田恩伊 (チョンウニ)

「モモの家」(前)

—地に根を下ろすこと—



阪急電車吹田駅から降りて、線路を渡り路地に沿ってしばらく歩くと、コンクリートの建物が並ぶ住宅街の一角に小さな公園があらわれ、そのすぐ先に一軒だけ古民家が見えて来る。「つなごりのなかで はたらき 学び あそぶ」ところ。ここは大きな楠が庭に立っている小さな拠点「モモの家」だ。もう 20 周年を迎えている。「モモ」という名前はミハエル・エンデの『モモ』に因んでつけたそうだ。確かに私が中学校の頃、エンデの『モモ』は韓国でも広く知られていて、歌や映画までつくられていた。私と年代の人なら歌の一節くらいは誰でも覚えているはず。

「モモの家」が始まったのは 1996 年。私が最初の留学から韓国に戻ったのが 1995 年、阪神淡路大震災が起って一週間後だった。幸いに帰国して間もない時期に仕事が決まり、翌年の 1996 年は仕事の意欲に満ちた働き盛りの時だった。韓国は 消費者運動、環境運動、有機農業運動、教育運動などを含む包括的な市民運動の一つとして共同体運動が広がっていた時期でもあった。社会人になったばかりの私が共同体と具体的なつながりをもつようになったのもこの時期からだった。手元にある「設立 20 周年を迎えて」という『モモだより』(230 号)の沿革を読んでいると、ちょうど 20 年前の自分を思い出し、妙に「モモの家」の歴史が重ね合わされてきた。



私は今「モモの家」の運営委員の一人 T さんの家に同居人(下宿人)として生活している。9 月から約 3 週間は共同体の参与観察者として、そして住人として「モモの家」に住みながら共同生活を過ごした。この一連の流れを理解していただくために、少しだけ説明を加える必要がある。今私は 9 年目になる日本の生活を終えて国に帰る準備を進めている。ここ数年間は健康問題で煩い、今まで私を支えてくれた生活のル

ーティンがすべて崩れたことが大きな原因にはなかったが、決してネガティブにとった決断ではない。自分の体が過去のようなルーティンを取り戻せない状態になったことは、自分を新しく切り替える良いチャンスだという意味かも知れない。ひよつとしたら、意志というものをまともに働かせ自分をトランジットできる最後のチャンスが与えられたのかも知れないと思う。

それ故、今年の春はほとんどの荷物を整理して本は韓国に送り出した。順次に片付けてきた大学関係の仕事も最後の役目を果たせば今年いっぱい無事終了できそうである。今は残りの研究プロジェクトの遂行と後期の授業を行っている。留学から研究職まで、約 9 年間続いてきた生活はもう 2 ヶ月程度で終わりを告げる。それで日本の生活を切り上げる前に、最後に一つ念願のことを実行してみたいと考えた。それは数ヶ月間日本の田舎に閉じ籠もって生活してみることだった。大学の仕事からもかなり自由になったこの絶好の数ヶ月を、どこかの情趣のある田舎に閉じ籠もって今まで関わってきた共同体グループや人々のライフヒストリーを書きながら過ごしたいと思ったのである。日本で多くの共同体を訪ねて来たが、何よりも深く私を魅了させたのは日本の田舎だった。誰かが見捨てたばる屋敷でも良いから日本の田舎に小さな家を持ちたいと考えたこともある。

こうして勝手な思いを膨らませながら、周りに閉じ籠もる田舎があるのか相談して見たが、中々見つからない。日本には沢山の空き家があるからと思って安易に考えていたのが私の判断ミスだった。ところが、ある日予想外のところから“丁度良い家がありますよ”という話が届き、ことは順調に進むように見えた。「モモの家」の住人会にも、ようやく田舎の家が見つかったと喜びの声を伝えた。しかし 万事すんなりと思う通りにはならないという教訓に気づかされるには、それほど時間がかからなかった。そして、また思わぬところから意外な道が開かれるという教訓も。こうした事の流れを私たちは「導かれる」、あるいは「生かされる」とも言う。

「モモの家」で過ごした 3 週間は、まるで次のステップを用意していたかのように、私と T さん

の共同生活という新しい展開に繋がりはじめることになった。私はこれをコミュニティ性が健康に働いている「場」の力だと考えている。T さんは 10 年以上「モモの家」と関わってきた女性で、約 2 年前から「てんから」という定食屋を運営している。一種のコミュニティ食堂である。私は「モモの家」のスタッフ二人と食事をしながら、日本で過ごす最後の冬の田舎暮らしは叶えられなくなってしまったと、嘆いた。そうすると、カウンターの向こうで食事を作っていた T さんが“私の家においでよ”と言い出した。“田舎じゃないけど、近くに大きな川もあるから散歩もできるし、下町だし、面白いよ”と。T さんとは数回しかあったことはないが、2 年ほど前に私の神戸の家と一緒にキムチを漬けたり、韓国料理をつくって楽しんだことがある。こうして、その場、その一言ですべてが決まった。私は一週間後 T さんの家に移ることとなった。



今まで注目に値するような多くの共同体やコミュニティを訪ねて来た。私はこうした経験から得た一貫した視点を持っている。それは、共同体の規模や勢いがどうであれ、少なくとも 5 年以上は自分たちの理想や信念を貫いてきているのかどうかと言うことである。そして、人も組織も、特に共同体に対する評価は、10 年は見届ける必要があると口癖のように言う。それは根を下ろして、自分の「場」を築くということは「信頼」を築くということとも通じるからである。今の時代は、浮遊するものたちの一時的なつながりに魅力を寄せる傾向が強くなって来ている。しかし 対面関係を持ち続けるということは、美醜を含む人間性を理解し合い時間と場を共有するということである。根を下ろすものたちこそが持っている本当の寛容性と包容力はそこから生まれて来る。浮遊するものたちの優しさは、本質的に去ること、立つことでは生まれてこない。(次号に続く)